岩波の文革記録映画『夜明けの国』のDVDブック——毛沢東・孫文の演説録音をめぐって

金春 安明

私が父と一九六七年の封切りの時に見た岩波の記録映画『夜明けの国』がDVDブックで出版された事は、私にとって懐かしい嬉しい事です。

三年程前に、色褪せて傷みも有る映画フィルムが土屋先生の知るところとなり、二〇〇六年七月十六日、専修大学でシンポジウム（「イメージとしての「文化大革命」——映画『夜明けの国』をめぐって」）が行われ、私も資料を提供し、発言して、楽しませて頂きました。その頃、偶然にか、ケーブルテレビ「日本映画専門チャンネル」で傷・退色の無い物が放送されました。土屋先生らは『夜明けの国』の研究に力を入れ、このたびDVDブックを出版。この辺のいきさつはDVDブックに詳しく書いてありますので、まだお求めでない方には是非お薦め致します。

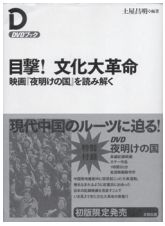
DVDブックを見て私が初めて知ったのは、移動映写隊の山村の放映シーンに二種類の版が有る事です。

話が横道にそれますが、当時の様子を紹介しますと、文化大革命と一言で言っても、大ざっぱに分けて、林彪生前と死後に分けて、日本に輸入される中国国内出版物の様子に硬軟の差が見られます。

一九六六年八月下旬、紅衛兵が街の古い看板を壊し新しい看板に掛け変え、八月二十三日、『人民日報』に「工農兵要堅決支持革命学生」と「好得很」の社説が発表されて以来、神田神保町や善隣学生会館の中国書専門店には政治や階級闘争の出版物しか輸入されなくなり、文学書は香港三聯書店・香港中華書局・香港商務印書館の複製本しか輸入されませんでした。それらの本は中国国内の物ではないので、国内で何が出版されていたのか、何を読む事が許されていたのかは全く不明でした。日本の新聞には紅衛兵が古い本を焼いたとかの報道が載り、私は「中国人民と共有でき、政治色の少ない本」に飢えていました。

まれに『電工基礎知識』（文革前に出版された本の一九六八年頃の再刷本、初めに毛主席語録の一節が加えられたか）や、一九六七年頃の書き下ろしの、蚕や桑に関する本を店頭で見つけた時は、周囲が政治闘争の印刷物ばかりだったので、自然科学書でさえ新鮮に感じ、必要も無いのに買ってしまった記憶があります。

一九六六年八月下旬に紅衛兵が街に出てから、一九六九年四月の中国共産党第



土屋昌明編著
目撃！文化大革命
——映画『夜明けの国』を読み解く
A5判　208頁
太田出版［3500円］

九回全国代表大会を経て一九七一年の林彪の死亡までの期間は、そのような政治一色の時代に感じられ、私は中国国内の公式の報道や出版物の行間から、何かしらの文学的な香りを探し求めたりしていました。この辺の事は、文革は中国国内で行われ私は「日本という国外」に居たという条件の下とは言え、この雰囲気は、林彪時代を知る上で基礎に据えて頂きたい前提条件だと思います。

一九七一年、文革版の新しい『新華字典』が出て大喜びで一九七一年六月初刷の淡緑色紙装の定価七角三分の平装本、八月初刷の濃緑色塑料装の薄凸版紙本文の一元一角の精装本などを買って喜んでいたら、間もなく林彪が死に、『新華字典』は林彪関係の字句を書き換えた本が出ました。同年十一月北京第四次印刷という、薄凸版紙本文、定価一元一角の藍色塑料封套の精装本が「凡例」の末に「不会漢語拼音的読者怎様使用『新華字典』」という文章を加えているのは実は「林彪関係を処理済み」というサインだと思います。

一九七二年には『三国演義』『水滸（繁体字縦書七十一回本）』『西遊記』『紅楼夢』が解禁出版され、買い求め、中国国内の新しい動きを感じたものです。

その林彪の失脚を受けて、岩波が、移動映写隊のシーンの林彪が映写に出ているカットを毛主席の物に差し替えている事に土屋昌明先生は気付かれたのでした。あの頃はそんな事にも気配りをしなくてはならない時代だったのです。

七五ページに言及されている「画面の口と声が合わぬ」件、私はあの声は絶対に周恩来総理の演説録音を貼り付けた物だと思い、一九六六年九月三十日、国慶前夜の国宴ではないかと申し上げた所、土屋先生と森瑞枝さんは国会図書館の関西分館から一九六六年九月三十日の国宴での周恩来総理の演説原稿及びその前後一年を取り寄せて舐めるように点検されたが、『夜明けの国』の長春の国慶節の問題の音声に相当する記事は見つからなかったとの事。両氏にはとんだ手数を掛けてしまいました。でも何時かその講話稿が見つかると信じています。

『東方』五五号に書いた、毛主席が「同志たち万歳」と呼びかけたと称する放送の件、一九六六年秋当時の私は北京放送が同じ事を反復して放送する習慣とは知らず、「また放送してる。また放送してる」と思いつつ、遂に録音を取り損ねたという残念な経験が有りました。その後、私は「あれは林彪が『人民万歳』と言ったのを周囲の人が毛主席の声と思い込み、大々的に放送したが、後に間違いと気付き、その後は私の耳に触れなくなった」との想像もしました。

最近インターネットのYou Tubeで「人民万歳」という表題を見つけ、次に中国のサイト「紅軍旗」の「毛沢東博覧」http://www.mzdbl.cn の「影音資料」に文献紀録片『走近毛沢東　紀念毛沢東同志誕辰一一〇周年特輯　一八九三―二〇〇三』（中央新聞紀録電影製片廠、二〇〇三年）を見つけました。そこには日時を説明せずに、天安門楼上で人民服で帽子なしの毛主席の「万歳！」という声が聞こえます。字幕は「人民万歳」と書いてあります。後ろには軍服の林彪が居ますか

ら、文革中の映像でしょう。「毛沢東博覧」の「影音資料」では、一九六六年八月十八日から八回にわたる紅衛兵大会の記録映画が林彪の映像や演説まで削除なしで収めてあるので驚きです。第七回の映画は『毛主席永遠和我們心連心　毛主席第七次検閲文化革命大軍』（中央新聞紀録電影製片廠・中国人民解放軍八一電影製片廠聯合摂製）で二十二分の映画。始めから十四分すぎの辺に十一月十日午後三時三分に毛沢東主席が「同志們万歳！」と呼びかけたというナレーション付きで、「万歳！」という音声が収められていますが、毛主席は赤い襟章の軍服と軍帽です。私が四十二年前に聞いた日本語北京放送のアナウンサーは毛主席が「同志の皆さん万歳」と呼びかけたと言っていました。「人民万歳」ではありません。もちろん、十一月十日には軍帽で「同志們万歳！」、別の日時に人民服で「人民万歳！」の可能性は有るかもしれませんが、私の記憶では文革中に毛沢東主席の肉声が公開されたのはこの時と、共産党第九回全国代表大会だけでした（一九七三年の共産党十大での毛主席の声は改革開放後に初めて聞きました）。

とは言え私は初老の耳、これ以上の評論は避けます。

余談ですが、土屋昌明先生は「中国の性愛文献」を連載なさっている土屋英明先生とは別人です。親戚関係でもなく偶然の相似です。

中国人で文革の研究書を書かれている金春明氏も私とは別人です。まだお会いした事が有りません。

長春の国慶節のシーンの音声が周総理であるとする私も、最近少し寄る年波を感じ、主張する元気も弱って来ました。人間、年を取りたくない話を次にご紹介します。

「再び毛沢東主席の演説録音から」を『東方』一六七号に載せて頂いた後、いわゆる「師哲回想録」が日本語版でも出版されましたが、老人の記憶という物はアテにならないです。師哲氏の回想録では、一九四九年十二月シベリア鉄道に乗って十六日にモスクワ駅に着いた毛沢東主席は風邪をひいていて、ソ連側から

中国発行の日本語月刊総合誌

人民中国

People's China 10月号

人民中国雑誌社　定価400円（税込）
［年間購読料4800円（税込）］

【グラビア特集】北京パラリンピック【社会・経済】「多極間協力時代」は到来するか【連載】大メコンに生きる④熱帯雨林の保護神◆太極拳よもやま話⑨「24式」の基になった楊式太極拳◆24回フォトエッセイ・慈覚大師円仁の足跡を訪ねて㉒長安脱出◆茶馬古道の旅⑰「世界の屋根」を行く◆中国茶文化そぞろ歩き⑩潮州工夫茶◆映画のセリフで学ぶ中国語㊼言えない秘密（不能説的・秘密）◆放談ざっくばらん・倭人と倭人文化の謎◆天下の黄河が寧夏を富ます・寧夏回族自治区成立50周年◆快楽学唱中文歌・張靚穎『新不了情』ほか

『人民中国』は中国で編集・発行される日本語雑誌です。政治、社会、考古、歴史、美術など幅広い分野の最新情報を満載。ご希望の方に見本誌お送りいたします。
☎03（3937）0300　東方書店

の配慮も有り、演説を省略し演説原稿を報道関係に配布し演説に代えたと師哲氏は回想しておられます。これを見て私はびっくりしました。

一九八〇年前後でしょうか、『ドゴールと毛沢東』という西側のテレビ番組を日本のＮＴＶが放送しました。その中に、毛沢東主席が厳寒のモスクワ駅で白い息を上げながら原稿を読み上げている「……及世界愛好和平人民的共同努力」から「中蘇友好与合作万歳！」までの音声がはっきり収録されています。日本語翻訳字幕が今一だったので、早速私は国会図書館に行って、『人民日報』は見当たらなかったので当時の香港の『大公報』に載っている新華社の記事を見つけました。新華社の前書きとして、毛主席はモスクワ駅で「拡音器」の前で以下の演説を発表したとあり、本文はＮＴＶの音声と一致します。また、皮肉な事にＮＴＶでは毛主席の背面少し離れた所に立つ師哲氏の姿が映っているのです。

そこで私は考えました：風邪ひきや厳寒によって、師哲氏のロシア語同時通訳は省略されたのでしょう。それを年を経た後の師哲氏は演説自体が省略されたと思い違えて、「回想録」に書いたのでしょう。長旅で師哲氏自身も疲れていたと思います。悪意のウソではないでしょう。ただ、「回想録」が出版されると、それが一人歩きし始め、天下の人民出版社の『毛沢東文集』第六巻は該演説の表題を「……書面演説」とし、師哲氏の回想の裏付を取らずに表題としてしまいました。今のところ、中国国内の様々な現代史の出版物では「書面演説」という説と、「マイクロフォンの前で」という説が半々のようです。

中華人民共和国は一貫して孫文を尊重し、孫中山先生と呼び別格に待遇、文革中の十年間でも、国慶節には、マルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンに並び、天安門の毛主席の写真の真向かいには孫文の写真が掲げられていました。

一九八六年、中国唱片公司上海分公司から『孫中山先生講演』（編号ＨＤ－三一三カセットテープ）が出ました。孫文の肉声の標準語の二段と、その第一段の粵語つまり広東語の肉声から成り、貴重な資料です。

今年六月、YouTubeで「大陸不敢播的完整版国父原音」という肉声録音に気づきました。それをアップした人は、中国本土で放送された孫文の肉声録音が、冒頭の数分間しか引用されていない事に不満を感じ、「完整版」をアップしたとしていますが、普通話の第一段と第二段を別々にアップしていて捜しづらい事はさておき、残念なのは、上海版ＨＤ－三一三が収める孫文広東語の肉声をアップしていない事です。中国では文革後、『孫中山集外集』（上海人民出版社、一九九〇年七月第一版、一〇六―一〇七頁）で広東語の部分を活字化しています。

近代史も現代史も、資料の丹念な分析が大切で、そのためには、しっかりした資料の提供が望まれます。学問の目的は「真理と平和」（学習院院歌、安倍能成作詞）である事を世界の人々は忘れてはなりません。

（こんぱる・やすあき　能楽シテ方金春流宗家）